

## 阪大を日本のスタンフォードに!



黒川 敦彦\*

Let's go beyond Stanford University!

Keywords : start-ups, spinout, student entrepreneur

### はじめに

皆さんは大阪大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー(VBL)をご存知だろうか。1年半ぐらい前までは入り口は施錠され、大学内の他の研究所と同じように関係者以外は基本的に入出入りすることはなく、当時工学部で勉強する私にとっては、興味はあるが中で何が行われているかわからない建物であった。しかし、現在、VBLのエントランスは新聞、ビジネス雑誌、ビジネス書、インターネット端末を備え気軽に出入りできるサロンへと姿を変えた。

VBLは元々、光をテーマにした研究センターであり、その名前にあるように新しいビジネスの萌芽となるような研究を行うことを目的としている。しかし、それと同時にアントレプレナー志向の人材を育成するという目的も設立当初より有していた。前者の目的についてはより実用化を視野に入れた研究を行う方向に進みつつあることから達成の方向にあるといえる。そこで、今回は後者について学生と大学をテーマに産学連携という言葉も念頭におきながら話を進めたい。

### 少し前の大学と自分

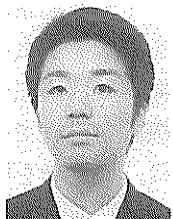
1年半前、私は工学部で勉強してはいるもののそ

の知識がどのように社会に還元されているのかという事が実感としてつかめず、いつしか科学技術には興味があるのと同時にビジネスとしてどう活かされていくのかということにも漠然と興味を持つようになっていった。当時、ネットバブルが全盛期でベンチャーという単語が新聞やニュースを賑わしており、その影響もあって大学発のハイテクベンチャーの話も一部持ち上がり始めていた。しかし、工学部として教育を受けていた自分にとってその話は現実味がなくベンチャーとは新しいビジネスモデルを使って文系の人間がやるもので、研究設備などを必要とする開発型のベンチャー企業の話などはそれほどちゃんとは語られてなかった。そんな環境の中、ライフスタイルとしてベンチャー企業経営者にあこがれる自分として、経営を勉強するため大学院は実務経験者でなくても進学できる慶應ビジネススクールに進学することきめ、4回生になり研究室に配属されるやいなや大学院試験の勉強をする同級生を尻目にビジネス・経営書や海外ビジネス誌を朝から晩まで読み漁るという日々を送っていた。

独学での工学という分野からビジネスの分野への転向ということもあって情報をあつめることにすら苦勞の連続でベンチャー経営の現場についての話などはまだまだ遠い話であった。試行錯誤を重ね何とか書籍による知識を詰め込み感覚としてビジネスの分野での話がわかるようになって来ていたころ、たまたま、VBL主催のセミナーの案内を目にし、以前より興味を持っていたこともあり参加することにした。

### VBLと阪大ベンチャーファクトリー(HVF)

VBLのセミナーは経営者や弁理士を招いての一般的なセミナーでそれほど強力にインパクトを受けるものではなかったが、その後の交流会が問題であっ



\* Atsuhiko KUROKAWA  
1978年9月6日生  
2001年大阪大学応用自然科学課応用物理学コース(工学部)卒業  
現在、新エネルギー・産業技術総合開発機構(大阪大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー受託研究員)、受託研究員、産官学コーディネーション(ソエゾン)  
TEL 06-6879-7755  
FAX 06-6879-7878  
E-Mail kurokawa@vbl.osaka-u.ac.jp

た。ベンチャー経営者、キャピタリスト、教官、学生などが参加する100名を超える規模の交流会でたまたまVBL専任の教官である兼松助教授と話す機会を得た。兼松先生の話ではVBLとしても施設を広く開放しアントレプレナー志向の人間が集い情報交換を行うような場所とし、学内からのスピナウトベンチャーを支援できるような機能を持つ施設にしたいと考えているとのことであった。私としても大学発のベンチャー企業と言うのものには興味があるものの、あまりにも理系の人間はビジネスの世界からは遠いところにいるということを感じ、そういうことを自己学習できるきっかけがあればという思いから、なにか解決法はないかと考えていたことを話した。どうも、数十分後には意気投合してしまっていたようだ。その後、兼松先生の紹介で日本にインターンシップのために来ていたスタンフォードの学生に会う機会があった。彼らはアントレプレナーを支援する学生組織の代表でスタンフォードに由来するベンチャー企業経営者を呼んできて講演、勉強会などを主催する活動を通し自分たちは将来起業するための知識と人脈を広げていると語っていた。彼ら自身、スタンフォードで勉強していることによってシスコ、サン、ジェネンティック、シリコングラフフィックスなどのベンチャー企業の経営者になれると真剣に考えていた。日本の学生とは明らかにビジネスの世界への実感が違い、明確なビジョンを持ち学習する意欲も高かった。そして、彼らは自分と同じように工学部の学生であると聞きショックだった。

その後、スタンフォードの学生たちからの刺激もあり、大阪大学でも彼らのような学生組織を作ろうと考え、VBLに出入りする学生や自分の周りの学生を巻き込みプランを練り、2000年9月には阪大ベンチャーファクトリーという名前で活動を開始した。目標は決まっていた。「阪大を日本のスタンフォードに！」である。当面の活動目標としては、学生がビジネスについて自己学習し人脈を養い、アントレプレナー精神を高揚させることであり、そのために小さな講演会や交流会、そしてビジネスプランの作成のための講習会を行い、実際に苦労しながらもビジネスプランを作成しキャピタリストの前でプレゼンテーションを行うといった活動を昨年度は行っていた。その成果もあって、ビジネスプランコンテストで合計151万の賞金を獲得するに至った。VBLとしても終始学生の自主性を尊重しバックアップを行

い続けた。

## 大学でのインキュベーション

HVFの代表として活動を続ける中、平行してビジネススクールへの進学へ向け勉強はしてはいるものの、このまま大阪大学を離れるのは少し忍びないような気がしていた。そんな愛校心の芽生えた私に経済産業省の特殊法人である新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)のフェロー事業で産官学の連携を促進するためのコーディネータを養成する部門があるという話が転がり込んできた。確実に採用される訳ではないがビジネススクールへの進学をやめ大阪大学に残ることを決意した。もし採用されなくても研究生として活動を続けたいと思った。今考えるとかなり無謀であったかもしれない。

以上のような経緯より現在、学生組織HVFと研究機関VBLは学生の自己学習をサポートするための機関であると同時に学生・若手研究員が率先して大学の研究を社会に還元するひとつの手段としてのスピナウトベンチャーをインキュベーションする仕組作りを目指して二人三脚でステップアップを開始している。

VBLとしては先端科学技術共同研究センターを中心に活動を開始した大阪TLOとも協力し大学内の技術が実用化するためのお手伝いをするために現在足場固めを行っている。皆さんもご存知のように現在21ある承認TLOの内上手くいっているものは少ないのが現状であり、「TLOは上手くいかない」という議論まで持ち上がる始末である。しかし、世界中を見渡してみても大学の機能としてその研究成果を社会還元するという目的はますます高まりつつあり、その手助けをするためのTLOは必要なものであると私自身は考える。現状を嘆くより、これからその問題をどう解決していくのか、その答えをVBLとしては考えてきたつもりだ。研究室からでてきた特許及びアイデアの中でそのまま企業にライセンスできるものは少ないのが現状である。しかし、工学部ですら大学内で実用化のために十分な応用研究を行うことは困難あり、今、それを解決するための一つのプランとして大学外に別組織として研究サイドからインキュベーションを行う機関を設立できないかと調査を行っている。そこでは、研究者を雇用することができ、ある分野に特化し受託研究を引き受けるのと同時に自らが新しい提案を行っていく

ことができる。まだまだ、少し先の話ではあろうが企業の中央研究所が相次いで崩壊し、産学連携の重要性が高まりつつある現在、確実に追い風が吹きつつあると考える。

HVFについてはもう少し実現可能な話で、数件の商工会議所や企業の異業種交流会からのオファーで、大学の技術情報を企業につなぐためのコーディネータを学生で組織するという試みを開始した。内容は、企業からの具体的なニーズ、例えば「ダイオキシンの計測関係で何か商品を開発したい。」というような案件に対しHVFのエージェントが大学の教官層によって組織されるアドバイザリーボードの人的ネットワークを用い研究者の情報を発掘し企業に提供する。その対価として学生は報酬を得ること

ができる。まだまだ、ビジネスとしてペイするかどうかは全くわからない、しかし、漠然としたデータベースを整備するのではなく必要な情報を提供するという試みは意味があると考えフィージビリティスタディを開始することにした。

#### ま と め

22歳の若者が何を壮大なことをいっているのかとお思いかも知れない。しかし、一つだけ持つ強みとしては私自身、誰に強制される事もなく自らこの道を選んだ。だめだからといって帰る場所はなく、経験のないものとしてチャレンジし続けることは宿命である。これからの日本はそんな若者に寛容であるはずだと信じ、前に進んでいければと思う。

